

## 第8章 部族のよびかえ

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	456
雑誌名	部族と国家 : その意味とコートジボワールの現実
ページ	191-209
発行年	1996
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00012990">http://hdl.handle.net/2344/00012990</a>

## 第8章

# 部族のよびかえ

前章では部族を古典的進化論的人类学と、それを枠組みとして継承したマルクス主義的民族論との関連で検討した。かわって本章では、欧米の人類学において1970年代から登場しはじめ、今日ひとつの大きな潮流をなすに至っているいわゆるエスニシティ研究との関連で、それを投影している日本の研究状況の問題として、部族概念を検討する。

### I tribe (英) と ethnique (仏) または groupe ethnique (仏)

日本語で一般に部族と訳されている英語のtribeに対応するフランス語は、今日少なくとも実態的にアフリカの部族単位を示す語としては、ethnieまたはgroupe ethniqueである。英語でtribeとよんでいるバウレ族、グロ族などの単位を指し示すのに、フランス語では語源的に英語のtribeにあたるtribuではなくethnieまたは、groupe ethniqueという語があてられてきたのである。

以下に引用するような主張は、明らかにこの英語とフランス語との用語法の違いについて誤解を含んでいる。

「tribeという用語は、種々の非アフリカ人観察者によって今日なお用いられているが、tribeはアフリカの伝統的、あるいは過渡的な社会においては、ずっと以前から重要な役割を演じることをやめてしまっている。tribeは伝統的社会全体を表現していたことはなかったということを明確にしておく必要がある。それは単にひとつのpeopleまたはethnic group内の小

区分であり、制度化された一区分である。」<sup>(1)</sup>

この原文は英語で書かれているが、著者は旧仏領植民地セネガルのアフリカ人研究者である。「ひとつのpeopleまたはethnic group内の小区分であり、制度化された一区分」というのは、明らかに仏語のtribuを指している。フランス語圏ではすでに第3章で示したように、ethnieを構成する小区分、一般に数個の村のまとまりを、植民地行政上の用語法としてtribuとよんできたのである。

「行政当局は住民自身がひとつの名でよんでいる数カ村で構成されるひとつの拡大した政治的単位をtribuという名でよんでいる。……ブアフレ郡の231の村は、36のtribuに分けられる。それらのうちには行政当局がその構成を若干修正したものもあるが、すべてのtribuが、“chef de tribu”という役職の権威のもとに行政単位として固められたのである。しかし“chef de tribu”という役職は、伝統的な権能のいかなるものにも照応するものではなかった」<sup>(2)</sup>という。A・ドゥリュなどもクランやリネッジなど親族単位を表わす語とはっきり区別して、tribuは数個の村のまとまりという純粋に領土的な単位であるとしている<sup>(3)</sup>。したがって、実態的には英語のtribeに対応していないのである。前記の引用文の「ひとつのpeopleまたはethnic group」に対して英語では一般にtribeという語が用いられてきたのである。したがって英語の問題としては上記の主張は意味をなさない。逆に次節で紹介するtribeという用語をethnic groupに置き換えるべきであるという主張は、フランス語では意味をなさないのである。

このような英、仏両語の用語法の差異はどうして生じたのであろうか。tribeに代えてethnic groupという用語を用いるべきであるという主張が、フランス語では先取りして実行されたのであろうか。フランス語ではtribuをethnieによびかえるという動きがすでにあっただのか。ethnieという用語法が慣行化したのはいつ頃からだったのか。フランス語文献では、バウレ、グロなどの単位は当然のこととしてethnieまたはgroupe ethniqueとよばれている。政府の統計類でも——手元で確認できたものは、最も古いものでも1958

年に公開された比較的最近のものではあるが、植民地時代のものである——このethnieまたはgroupe ethniqueという用語法で統一されている<sup>(4)</sup>。

以上の点からして英語でtribeとよばれてきた集団的単位を仏語ではethnieまたはgroupe ethniqueと意識的によびかえたということがあったようにはおもえない。すでに指摘したように英語のtribeと語源を同じくする仏語のtribuは、ひとつのethnieの小区分を表わす植民地行政上の用語として早くから慣用されてきたことがその理由であり、英語でtribeとよばれてきた集団的単位は、フランス語はその当初からethnieあるいはgroupe ethniqueとよばれてきたものとおもわれる<sup>(5)</sup>。

要するに英語のtribeもフランス語のtribuもラテン語の同じ語源に発してはいるものの、近代言語としてそれぞれの言語体系のなかに復活する過程で異なったニュアンスをもつに至ったのであろう。

英語におけるtribeという語の歴史について、P・H・ガリバー (P.H. Gulliver) は「……中世英語にそれ (tribe—引用者注) が登場して以来、しばしば互いに矛盾する、独断的、侮蔑的、感情的でありまた特殊的であると同時に一般的でもある複数の意味と、日常用語としてのあいまいさを獲得した。ヨーロッパのアフリカ侵略と植民地化にともなって、アフリカについてこの語の使用が拡大されるに及んで、さらにその意味、含蓄は増大した」<sup>(6)</sup>と述べている。英語世界においてtribeという語が辿ったこのような歩みを、フランス語のtribuは少なくとも独自の道としては歩まなかったようである。英語のtribeがtribal society (部族社会)、tribalism (部族主義) というようにひとつの観念として抽象化され、tribal (部族的) な世界を対象化する研究が社会人類学として成立したのに対し、フランス語のtribuは植民地時代の初期からひとつのethnie内の小区分を表わす行政上の用語として採用され意味が固定されてしまったためもあって、英語のtribeと同じような展開を示さなかったのである。そしてたとえばアフリカのtribal society (部族社会) は、フランス語ではsociété traditionnelle (伝統的社会) とよばれるのが一般的である。

では日本語の部族の場合はどうであろうか。日本語の部族は英語のtribeの

忠実な訳語としての位置を守っている。フランス語には英語のtribeと語源を同じくするtribuという語が存在しているにもかかわらず、用語法上、tribeとtribuには若干のズレが生じているのに対し、全く異なった言語体系の日本語の部族の方が、tribeとの対応関係は一致しており、tribeの忠実な訳語の位置にある。本書ではフランス語文献に登場するethnieまたはgroupe ethniqueの訳語としても部族という用語をあてることにした。そしてフランス語のtribuについては、単にトリビュとカタカナ表記することにした。部族とは別個の訳語をあてることは、英、フランス語間の用語法上の差異を明示するためには有効であるが、しかし今度は逆に英語に存在するethnic groupとも、異なった語を用いなければならなくなってくる。そこで本書では少なくとも実態的単位の呼称としては部族(=tribe)で統一することにした。したがって本書における部族は、英語のtribeの訳語ではあるが、フランス語のethnieの訳語の位置にはなく、ethnieをtribe=部族の訳語の地位においているのである。

このことに関連して興味深いのは、日本語における民族である。英語のtribe—nationを基準として考えると、フランス語の場合にはすでに述べたように、それはethnie—nationとなって前者の方に若干の差異が生じている。日本語ではそれは部族—民族となるわけであるが、前者の部族は英語のtribeにほぼ正確に照応しているのに対して、後者の民族の用語法には英語のnationとの間にズレが生じているのである。

田中克彦は日本語の民族について次のように述べている。「民族を学問的にとりあげようとするとき、日本では、ミンゾクというこのことばの、日本語の事実即ち慣用の意味から出発するのではなく、nationという語と等価の訳語として考え、nationという外国語について定義された概念をそのままミンゾクという語に移し入れて考える」。そして日本語の民族学の対象は「近代国民国家の民族であるフランス『民族』やイギリス『民族』ではない。すなわち『民族』学の研究対象は『民族』ではなく、社会科学的な意味における民族をなす以前の民族的結合の諸形式、すなわちなロードノスチ的集団の研究である」<sup>(7)</sup>。

日本語の民族は、英語のnationとは異なって未開民族、少数民族といったような表現が可能なニュアンスをもっている語であり、民族学はフランス語のethnologieの訳語として、もっぱら未開とか少数と形容される民族を対象としてきたのである。したがって後に検討するように部族のよびかえに際して、日本語では民族という語を使用することにそれほど抵抗が起こらない。

いずれにしろ英語のtribeとnation、フランス語のethnieとnation、日本語の部族と民族という一対の概念は、一応、対応関係にあり、したがって相互に翻訳可能におもわれるが、それらの間には微妙なズレが存在しているのである。すなわち英語のそれを基準にしてみると、フランス語の場合は他者を指し示すethnie、日本語で自己を指し示す民族の方にズレが生じているのである。

## II tribeのよびかえ——ethnic group

アフリカ諸国の独立以降、tribe概念をめぐる論議のなかでtribeに代えてethnic groupという用語を用いるべきであるという主張が、英語文化圏であらわれた。第7章I節で引用したA・W・サウゾール (Aidan W. Southall) もその一人である。前節で引用したダカル大学のアフリカ人研究者F-A・ディアラ (Fatoumata-Agnès Diarra) は次のように主張している。「事実問題として“tribe”, “tribal”, “tribalism”などの用語は、現実を科学的に記述するためにはふさわしい用語ではない。それは意識的、無意識的に非アフリカ人自身の目にも——そしてあのおなじみの疎外作用を通じて一部のアフリカ人自身の目にも——アフリカの人びと (peoples), 諸民族 (nations) に対する不信をうえつけようとするイデオロギー的な用語である」<sup>(6)</sup>。

ディアラは、このようなtribe概念に対する批判から、tribeという用語を放逐してethnic groupという用語に置き換えるべきであると主張し、「セネガルの国民社会 (national society) を構成しているpeople, すなわちethnic group

間に存在する関係」をたとえば「西独におけるバイエルン人、ラインラント人、ザクセン人、バーデンビュルテンベルク州の原住民(natives)らの関係」<sup>(9)</sup>と同質のものと位置づけようとする。つまりtribeという用語は、ヨーロッパ中心の価値観に支えられたアフリカ人に対する侮蔑語であるから、これを排し現代アフリカの現実とヨーロッパの現実とを同格に位置づけるためにethnic groupという用語をtribeに代えて採用しようというわけである。

このようにして1970年以降、英語圏の人類学ではtribe研究に代わってエスニシティ研究が主流になってきたわけであるが、R・コーエン(Ronald Cohen)は、この「“tribe”から“ethnicity”への転換」は、「人類学の視座における基本的変化を内包している。それはひとつの用語をより受け入れられやすい用語に単に置き換えるという以上の、はるかに深く浸透するひとつの変化である」<sup>(10)</sup>という。彼はこの転換の意義を表8-1のように図表化して示している。

これに対してガリバーは、ディアラらのようなtribe概念批判を認めながらも、そのtribeをethnic groupという用語に置き換えることには賛成していな

表8-1 コーエンによる“tribe”と“ethnic”の比較

	単 位 名	
	“tribe”	“ethnic”
基本的認識論的特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 孤立的</li> <li>・ 原始的一祖先返りの</li> <li>・ 非西欧的</li> <li>・ 客観性強調</li> <li>・ 境界をもつ単位</li> <li>・ 組織的 (systemic)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 非孤立的</li> <li>・ 同時代的</li> <li>・ 普遍的に適用可能</li> <li>・ 主観性強調, あるいは主観主義と客観主義の双方</li> <li>・ 他者との関係においてのみ成立する単位, 種々の境界</li> <li>・ 可変。組織的要素の程度は多様</li> </ul>

(出所) R. Cohen, “Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology,”  
*Annual Review Anthropology*, 1978, p. 384.

い。その理由としては、tribeという用語は「東アフリカ人自身によっても今日なお用いられている」こと、「“ethnic”という用語がかもしたすみせかけの科学的正確さを回避することには価値がある」<sup>(11)</sup>ことをあげている。そして、「おそらくは不幸なことに、この用語法 (ethnic group—引用者注) は、主に知識人——主に非アフリカ人の知識人——に限られているようにみえる。そしてそれはときとして、時代後れで侮蔑的であると非難されている“tribe”という用語を使用することを拒否することに、ほとんど死物狂いなほど独善的な様相をもってこの用語は用いられている」<sup>(12)</sup>という。

ではフランス語のethnieには、英語のtribeのような言い換え問題は発生しなかったのであろうか。

1985年、*Au coeur de l'ethnie: ethnies, tribalisme, et état en Afrique*<sup>(13)</sup>と題する編著を公刊したJ・L・アムセル (Jean-Loup Amselle) は、そのなかでethnieについて次のように述べている。

「まずわれわれは、2つの術語の存在の前に立たされる。この2つの術語 (ethnie とtribu—引用者注) はフランス語ではその意味が接近しているが、アングロ・サクソン系の人類学文献では、第2の術語 (tribe) は特別な意味を獲得した。フランス語ではtribuが、ethnieとほぼ同ような意味で用いられているのに対して、それ (tribe) はアングロ・サクソン系の人類学者たちにとっては、社会組織の一類型——分節社会という類型——を意味する。この社会組織は、古典的な仕方では、同じ原初的な細胞から継起的な分裂によって生まれる同じ性格の社会的要素 (リネッジなど) の存在によって規定される。そしてそれはその点で中央権力を有する国家社会と区別される。ゴドリエが組織論上の疑問を提示したのは、社会の類型と人類進化の一段階を同時に指し示す“tribu” (正確にはtribe—引用者注) という語のこの意味である。」<sup>(14)</sup>

ゴドリエの問題提起とは、本書第7章で引用した論文である。したがってアムセルは、英語圏で発生したtribeのよびかえ問題を知っている。アムセルは、それは固有の意味を獲得した英語のtribeに関する問題ととらえているよ



うである。

ただし、注記のかたちでアムセルは次のように記し、ethnieにも若干、英語のtribeに似たニュアンスが含まれていることを指摘している。「ethnieという術語の古代的な使い方は、われわれのそれと結びつきがないわけではないことを指摘することができる。確かにギリシャ人は、ethos（複数はethné）とpolis（「都市」）を対置していた。ギリシャ文化の社会ではあるが、都市国家（cités-Etats）の組織が欠けているものは、ethnéであった」<sup>(15)</sup>。

結論的にいって、以上に紹介したようにアムセルが、ゴドリエの問題提起を承知のうえで、tribeのよびかえの問題はそれがフランス語のtribuとは異なった独自の意味を獲得したことによって引き起こされた事態であるとの認識を、1985年の段階で示していることからして、フランス語圏におけるethnieに関しては、英語のtribeのような問題は発生していないとみてよいだろう。

したがって、さしあたっての問題はtribe、部族という概念を有している英語圏、日本語圏のアフリカ認識は正しいのかどうかということである。ディアラらのethnic groupという用語によってtribeという用語を追放すべしという提案には、アフリカ人もヨーロッパ人、日本人と同じであるという主張が含まれている。微妙なニュアンスの差異かもしれないが、筆者にとっては、部族という枠組みのなかでとらえられているアフリカ人と、民族という枠組みのなかでとらえられている自分とは、本質的には同じではないのかということが問題となる。

部族を自らの外側にだけみる、そして自らを部族ではないものとしてとらえる、まさにその認識方法そのものが問題なのである。tribe、部族という用語をもつ言語文化のなかで生きてきたわれわれ自身の文化にかかわる問題である。とすれば、それは単に用語の置き換えだけではすまされない問題がこのtribeあるいは部族という概念のなかには含まれている。

### III 部族のよびかえ——民族，エスニック・グループ

tribeという語に侮蔑的なニュアンスを感じとってこの語に代えてethnic groupという語を用いようという英語文化圏で発生した動きは、1970年代以降、日本語文化圏にも飛び火してきた。それはこれまでの欧米の人類学と日本の人類学との緊密な関係を考えれば当然のことであった。

前節で紹介したディアラのような主張を代弁している日本人アフリカ研究者として、米山俊直らをあげることができる。

「アフリカを研究している者は、その対象が自然であろうと、あるいは人間社会や文化であろうと『部族』という言葉によく出会う。ナニナニ族という呼び方は、アフリカの人びとに対する場合にはごく普通の呼び名になっていて、だれもそれを疑わない。しかし、この呼び方そのものに、私の知っているアフリカの友人たちは強く反発している。」「私は、歴史的な説明などの必要な場合以外には、部族という言葉をなるべく避けて使わないこととし、ナニナニ族という呼び方を止めて、ナニナニ人と呼ぶことにした。」<sup>(16)</sup>

しかし、日本語文化圏におけるこのような部族に対する異議申立てに対する対応は、英語圏におけるtribeの場合とは、若干、異なっていた。すなわち、英語圏でtribeをよびかえるために登場したのは、ethnic groupだけであったのに対し、日本語圏では民族という語とカタカナ英語のエスニック・グループが登場してきたことが特徴的である。

以下、それぞれの語によるよびかえの意味を検討してみよう。

#### 1. 民族によるよびかえ

部族のよびかえに民族という語が登場したのは、日本語文化圏固有のことである。英語文化圏におけるnationにはそのようなことが起こらず、日本語

の民族にだけそれが起こった理由は、日本語の民族には英語のnationには必ずしも対応しない独自の意味の幅があることによる。

「民族と部族の区別については、現在の筆者には自分の意見を持って論ずる準備ができていない。当面、両者を明確に分ける根拠はないと思うので、本稿では『民族・部族』と一括して記した。」<sup>(17)</sup>

「文化人類学の立場からすれば、文化を共有している集団がやっぱり一つの単位なんですね。いくら小さくても、文化を共有していれば研究の対象としての単位であるわけです。そういう目から見ていく限り、民族であっても部族であっても、すべて同じ用語で表現すべきかと思うわけです。」<sup>(18)</sup>

これらの日本人人類学者の発言は、日本語における民族の位置を示している。日本語の側からみれば「例えば英語には、民族に相当する言葉がない」<sup>(19)</sup>ということになる。I節で指摘したように、日本語では田中克彦のいう「ナロードノスチ的集団」を専ら研究対象とする研究が「民族学」とよばれ、「未開民族」、「少数民族」といったような表現が、市民権を得て慣用されているのである。

したがって部族に対する異議申立てがあったとき、これを民族とよびかえることに、日本人人類学者たちはさほどの不都合は感じない。

「民族と部族を区別する客観的な基準をみいだすことは、きわめて困難なようである。私自身、学問上のこだわりから両者の違いをあえてみだし、使い分けるべきだと思ってきた。しかし、検討すればするほど両者の境界は曖昧であり、4、5年前から部族ということばを廃し、民族という用語に統一することにした。以後、とてもすっきりと人類の文化的下位集団を表現することができるようになった」<sup>(20)</sup>ということになる。

彼らがとまどうことになるのは、現代国家とのかかわりで、これまで部族とよばれてきた集団が登場してくるときである。「国家とかナショナリズムという次元とはほぼ無縁の、出自集団を中心とする初次的な“民族”生成の力学」<sup>(21)</sup>といったような文脈においてである。川田順造も「初次的」とか「 ”」を民族につけざるをえなくなる。

実は日本語の民族には、部族に対して異議申立てされた要素が含まれているのである。日本語で民族と概括される集団のなかには、個別的には「○○民族」と「××族」とよばれ区別される集団が含まれているのである。

「4千年にわたるユダヤ民族の受難の歴史は、ユダヤ民族という実体のない単なる民族論的状况だったのか、ケニアの牧畜民マサイ族は隣接の農耕民との間で『名づけ』や『名乗り』でしか説明できないほど境界がぼけているのだろうか」<sup>(22)</sup>(傍点、引用者)、というように、ユダヤとマサイは、同じ民族でありながら、個別には区別されて表現されることになる。

部族に対する異議申立ては、部族を未開民族とよびかえることによって解消される性質のものではないことは明らかであろう。そもそも、部族という語になぜ侮蔑的なニュアンスが感じとられるのかといえ、それはこの部族が民族に対して発展段階論的により後れた未開の人間集団として位置づけられているからであろう。

「部族が文化的統合の方向において民族レベルに達し、政治的統合の方向において国家のレベルに達し、両者が一致したときは、ヨーロッパの19世紀流の民族国家であるが、アフリカの現代の国家は、それらと異なる形態であることに特色がある」<sup>(23)</sup>。アフリカの現代国家がヨーロッパ諸国とは「異なる形態」であるということは、「文化的統合の方向において民族のレベルに達し」ていない諸部族によって構成されている国家であるということである。

このような認識は、アフリカの政治指導者たちによっても表明されている。

第7章で紹介したタンザニアのニエレレと同様に、コートジボワールのウフェ・ボワニも第6章で紹介したように次のように述べている。

「われわれが植民者たちから継承したのは、『国家』(Etat)であって『民族』(nation)ではない。民族形成には長い年月を要する。民族形成は10年や20年で実現できるものではない。フランスはそこに到達するまでに数世紀を要した。われわれの場合は彼らより早く実現できるであろうと私は思う。しかしながら、ひとりのバウレ人(コートジボワールの一部族—引用者注)が自分をバウレ人とみなすまえにイボワール人であると意識するまでには、

今日まだ至っていない。それは他の60の『部族』(ethnie)についても同様である。』<sup>(24)</sup>

部族という語は、経済発展論における開発途上国という語に対応しているのである。アフリカ諸国は、後進国、低開発国、開発途上国と時の流れにしたがってより聞こえのよい語でよびかえられてきたが、どうよびかえられようとも、それを支えているものは同一の発展段階論である。開発途上国という概念に侮蔑的ニュアンスが感じとられないのは、それが状況説明的であり、開発途上の国民経済という状況に関する規定であり、その経済に直接帰属する人びとの人格には直接、触れてこないからである。これに対して部族の方は、個人の人格により接近した各個人が帰属する基底的な人間集団に関する規定であるだけに、人間集団の態様についての発展段階論的な規定にすぎないのであるが、個人に対する侮蔑的なニュアンスを帯びやすいといえよう。

しかし、問題は部族という語が侮蔑的ニュアンスを感じとられやすいので、この語を他の語に置き換えるべきかどうかではなく、そもそも部族と民族の区別、その区別を支える部族から民族へという発展段階論そのものが、現代アフリカの理解にとって有意味かどうかということである。部族と区別された意味での民族ということならば、英語圏におけるtribe—nationと、日本語の部族—民族の関係は一致する。そして部族に対する異議申立ては、このように位置づけられた部族についてであり、福井ら日本人人類学者による民族へのよびかえは、実質的には未開民族とよびかえているにすぎず、この異議申立てには答えてはいないのである。

## 2. エスニック・グループによるよびかえ

部族という語に対する異議申立てに対して、民族という語によるよびかえは、日本語の民族という語がもっているニュアンスの幅を利用したすりぬけ的対応であるといえる。他方、エスニック・グループというカタカナ英語によるよびかえという対応が内包している問題は、さらに根が深いようにおも

われる。

ガリバーのいうethnic groupという語の「みせかけの科学的正確さ」は、日本語文化圏にカタカナ英語として輸入されるとき、さらにその呪力を増すことができる。そしてこの語によるよびかえは、今や日本のアフリカ研究においてひとつの流行となった感さえある。ついでながら、ethnic groupのethnicを民族と訳して「民族集団」という奇怪な訳語が登場しているが、この訳語の奇怪さは、集団をグループというカタカナ英語にもどし「民族グループ」としたとき明白になる。ethnic groupの訳語ならば少なくとも「民族的集団」とすべきであった。

とにかく、アフリカの部族に対するエスニック・グループというカタカナ英語によるよびかえは、日本人のアフリカ理解にとって大きな危険を孕んでいる。

その最大の欠陥は、認識するものと認識されるものとの関係において、この語の使用によって前者（ここでは日本人）が無意識的に中立的な「科学者」の目を獲得してしまうという点にある<sup>(25)</sup>。部族、民族にかかわる問題について検討しようとするとき、あらかじめ中立的な科学者の立場を保証されている人間は、この世界に存在しないのである。現代世界に生きるいかなる人間も、世界に大別して3000をこえるといわれる言語のうち、たったひとつの言語を母語としているにすぎない。英語といえども、いまだ世界言語の地位を獲得しているわけではなく、ましてやそのものとしては科学用言語であるわけではない。したがって一見、科学性をまもって登場してきたエスニック・グループの原語であるethnic groupという語にも、注意深い吟味、検討が必要である。ethnicという語に含まれている、他者性、周辺性、地域性に注目しなければならない。

まず第1に他者性、周辺性についていえば、この語は認識主体にとっての他者に対してのみ使用される語であるということである。

現代の日本の状況において、私のような非アイヌ系の日本人は、日本のなかでは日本人という族的な規制をほとんど感じさせられることなく生活して

いる。外国人に対しては、日本人であると感じさせられることはあっても、アイヌ系の日本人に対して、自分は非アイヌ系ということ以上にポジティブな意味で、〇〇系であると意識させられることはない。つまり非アイヌ系日本人は、日本のなかだけではあるが類を僭称して生活できる立場にある。非アイヌ系日本人は、アイヌ系日本人をエスニック・グループととらえることができても、自らをひとつのethnic groupに属する人間とみなすことはできない。そうすることができない状況のなかで生活しているのである。非アイヌ系日本人が、ひとつのethnic groupとしてとらえられるのは、移住してカナダやブラジルの社会のなかに位置づけられたときだけなのである。

日本国内に在住する非アイヌ系日本人は、ethnic groupという範疇から除外されているのである。したがって非アイヌ系日本人が支配している日本語圏で、アフリカの部族をエスニック・グループとよびかえることに、前者は何の不都合も感じない。日本人は一民族であり、アフリカに存在するのは部族であると発展段階論的に規定し、それゆえにアフリカ人に侮蔑的なニュアンスが感じとられることになっても、両者の間にはひとつの関係が成立している。しかし部族をエスニック・グループによびかえるとき、両者の関係は完全に遮断されてしまうのである。一方は普遍的な認識主体、科学者の地位につき、後者は試験管のなかに閉じ込められてしまうことになる。日本国土に生活している日本人と同じように、自分たちの土地で生活しているにすぎないアフリカの部族が、どうしてエスニック・グループとよばれなければならないのか。彼らは誰にとって他者であり、周辺的であるのか。この点で在日朝鮮人の李光一の発言は示唆的である。彼は次のように述べている。

「私の場合、最初からエスニック・グループの積極的な一員であったというわけでなく、ある時期から参加しようという意識をもちはじめました。いま振り返りますと、それ以降のほうが、外国のいろいろなエスニック・グループの成員と会話を交したりしましても、共通項をより多く発見できるようになったと思います。また、『ああ、この人たちとつながっているな』と感じることも多くなりました。自分自身まだよくわからないんですけれ

ども、コスモポリタンに至る道というのであれば、それは諸々のグループをただ観念的に超えることではなくて、むしろエスニック・グループの一員であることに徹することではないかと思います。何か超然とした立場にたつて、つながり合うということはありえないのではないか、というのが私の今の感想です。』<sup>(26)</sup>

「民族とは何か」を考究する「総合討論」の場で、なみいる日本人研究者たちのなかで李光一のこの発言で討論がしめくくられていることは、きわめて象徴的であるといえよう。

第2の地域性というのは、このエスニック・グループというカタカナ英語のもとになっているethnic groupという用語が、世界のどの地域で、この語によってどのような現実をとらえようとして登場してきたのかという問題である。つまりこの語の系譜を検討してみる必要がある。

この語が、アメリカ、カナダといった移住社会において発生したさまざまな社会的軋轢との関連で登場してきたことは明らかである。「移民国家としてのアメリカやカナダなどで盛んなエスニシティ論が、そのままの文脈で東南アジアやアフリカあるいはインドなどで用いられうるかどうかについては慎重な検討が必要」<sup>(27)</sup>なのである。

ethnic groupという用語は、系譜的に英語圏のアフリカ認識にかかわって登場してきた用語ではない。島田周平が紹介するJ・A・M・コバ(J.A.M. Cobah)のジェオエスニシティ(geoethnicity)という概念の提示もそのことをはっきり示している。

「……アフリカ諸国では多くの場合、それら各エスニック・グループが一定の地域的まとまりをもつ領域を占拠しつつ政治的に対立するという形をとることが多いため、政治的対立は地域間対立として明確な形を取って現われることが多かった。この様な理由からアフリカ諸国に見られるエスニシティを、一般のエスニシティとは区別し、ジェオエスニシティ(geoethnicity)と呼ぶべきだとする提案がなされてきている。すなわち特定の領域をもたず、言語や文化や宗教などによって一体感や帰属意識をもっている



エスニック・グループのエスニシティと、自分たちの土地と呼べる領域を所有しているエスニック・グループのそれとを区別するということである。」<sup>(28)</sup> (傍点, 引用者)

筆者の目からみれば、このジェオエスニシティという概念は、本末顛倒である。ここでいう「一般の」とは何か。「特定の領域をもたず、言語や文化や宗教などによって、一体感や帰属意識をもっているエスニック・グループ」がどうして一般であり、「自分たちの土地と呼べる領域を所有しているエスニック・グループ」が特殊であるのか。アフリカの部族を基軸に考えるならば、むしろ前者が特殊な形態ということになるのである。このような倒錯がおこったのは、「移民国家としてのアメリカやカナダ」の現実の理解のために登場したエスニシティという概念を、アフリカの現実の説明に応用しようとしたためである。

#### IV 部族の再定義

tribeあるいは部族をアフリカの現実を説明する用語としては放逐しようという動きについては、II, III節で紹介したとおりであるが、他方では部族概念をよりアフリカの現実にみあったかたちに定義、あるいは定義しなおそうとする試みもあらわれた。

II節で紹介したガリバーもその一人である。彼はtribe概念の放棄そのものには賛同しないが、「19世紀に一般的に通用していた」「たがいに親族関係で結ばれたひとつの社会組織のもとに結合した人びとの集団」<sup>(29)</sup>というような古典的定義も、彼が主に調査した東アフリカの諸部族の実態にはそぐわないとして、次のようなきわめてゆるやかな定義を示す。彼によればtribeとは「その成員、または外部のものから文化＝地域的基準 (cultural-regional criteria) にもとづいて区別される人びとの集団」<sup>(30)</sup>と定義しなおされる。それらは征服、被征服、移民などによって離合集散をかさねて今日あるようなものに歴

史的に形成されてきた集団の単位であり、tribeということばの通念的なイメージが示唆するような原生的、固定的な集団の単位ではないことを強調している。

このような部族概念の再定義の試みの特徴は、ひとつには今日なおアフリカで部族とよばれている集団の実態に定義の内容をより近づけようとしていること、そのこととの関連で古典的な定義においてはその重要な構成要素となっていたいわゆる血縁的紐帯、あるいは親族的要素をその新しい定義から取り除こうとしている点である。この血縁的紐帯をその定義の構成要素からは排除しようとする意図の背景には、モーガンの未開から文明、社会から国家、血縁から地縁へという人類の発展図式が存在していることは明らかである。血縁的紐帯を部族の定義から削除するということは、アフリカの諸部族の実態に関する事実認識にもとづくというよりも、その認識の枠組みの問題として、モーガンの発展図式を前提としてその枠組みのなかで部族を文明の側に、民族の側に引き寄せて定義しなおそうという意図を示しているといえよう。たとえば上記のガリバーのtribeの定義を、スターリンの民族の定義「……共通の言語、地域、経済生活および共通の文化として表現された心理状態を土台として形成されたところのひとびとの歴史的に構成された共同社会」と比較してみよう。ガリバーのいう「文化＝地域的な基準」には言語も含まれ、tribeは歴史的に形成された集団とされていることから、tribeに欠落している要素は経済生活だけである。「……共通の……経済生活」は湯浅赴男がリストから援用した「国民的生産力」（第7章Ⅲ節参照）を示唆しているのかもしれない。その意味では部族と民族との違いを経済の発展段階上に位置づけることも可能かもしれない。しかし人間集団の質的な規定としては、部族と民族はほぼ一致することになる。

このような部族概念の再定義の動きはどのように評価されるべきであるのだろうか。筆者には、このような動きは部族的世界——古典的な定義においては異質な世界として隔離、留保されてきた世界——内部への近代西欧の浸透過程のようにみえる。それは第三世界＝部族的世界の政治的めざめという

現実を前にして、西欧的近代の世界認識の方法が示した政治的対応であって、未開と文明に二分する世界認識の方法の基本的図式を根底的につきくずすものではないようにおもわれる。未開と文明に二分する図式はそのままに、そのように二分された文明という自分の側に未開(=アフリカ)の現実をより引き寄せて理解しようとしているにすぎないのではなからうか。それは部族的世界の台頭に迎合し、現実における部族的世界の消滅を宣言しているにすぎない。

[注]

- (1) Fatoumata-Agnès Diarra and Pierre Fougeyrollas, "Ethnic group relations in Senegal," *Two Studies on Ethnic Group Relations in Africa: Senegal, the United Republic of Tanzania*, Paris: UNESCO, 1974, pp. 11-12.
- (2) Cl. Meillassoux, *Anthropologie économique des gouros de Côte d'Ivoire*, Paris: Mouton & Co., 1964, p. 227.
- (3) A. Deluz, *Organisation sociale et tradition orale: les Guro de Côte d'Ivoire*, Paris: Mouton & Co., 1970, p. 28.
- (4) Ministère du Plan, *Inventaire économique de la Côte d'Ivoire 1947 ~ 1956*, Abidjan, 1958.
- (5) フランス語文化圏でethnieが今日のそれと接続するような意味で登場したのは、19世紀前半のことであるらしい。渡辺公三によれば、ウィリアム・エドゥアールらによって1839年、パリにSociété Ethnologiqueが結成され、「人種論的人類学」研究が展開されたという。  
渡辺公三「19世紀のフランス市民社会と人類学の展開」(『歴史学研究』1994年11月号) 42ページ。
- (6) P. H. Gulliver ed., *Tradition and Transition in East Africa*, London: Routledge & Kegan Paul, 1969, p. 7.
- (7) 田中克彦『言語からみた民族と国家』岩波書店, 1978年, 220~221ページ。
- (8) Diarra and Fougeyrollas, "Ethnic group...", p. 12.
- (9) Ibid.
- (10) Ronald Cohen, "Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology," *Annual Review Anthropology*, 1978, p. 384.
- (11) Gulliver ed., *Tradition and Transition...*, p. 8.
- (12) Ibid., p. 11.

- (13) Jean-Loup Amselle et Elikia M'bokolo eds., *Au coeur de l'ethnie: ethnies, tribalisme, et état en Afrique*, Paris: Editions la Découverte, 1985.
- (14) Ibid., p. 15.
- (15) Ibid.
- (16) 米山俊直『アフリカ学への招待』日本放送出版協会, 1986年, 15ページ。
- (17) 川田順造ほか「民族・部族をどうとらえるか—アフリカの事例から—」(『民族学研究』第48巻第4号, 1984年3月)の川田「緒言」462ページ。
- (18) 福井勝義(川田順造・福井勝義編『民族とは何か』岩波書店, 1988年所収)の「総合討論」での発言(320~321ページ)。
- (19) 綾部恒雄(『文化人類学2 特集 民族とエスニシティ』アカデミア出版会, 1985年所収)の「〈座談〉エスニシティ研究の現在」における発言(108ページ)。
- (20) 福井勝義「民族はたえず生成し, 変容する」(小向正司編『国家と民族—なぜ人々は争うのか?—』学習研究社, 1992年)16ページ。
- (21) 川田順造「緒言・いまなぜ民族を問題にするのか」(川田・福井編『民族とは何か』)7ページ。
- (22) 綾部恒雄「建設的民族論のために一名和克郎氏の批判に答える—」(『民族学研究』第58巻第1号, 1993年6月)93ページ。
- (23) 富川盛道「部族社会」(小堀巖ほか編『現代の世界 7 アフリカ』ダイヤモンド社, 1971年)116ページ。
- (24) *Fraternité Matin*, 29 septembre 1989.
- (25) 清水昭俊はこの点について「日本人にとっては, 人類学的理解を表現する言語は, 母語である日本語と, 概念の多くを翻訳をとおして得ている英語その他の西欧語との二重構成である」, 「翻って考えるならば, これは日本人など非西欧の人類学者の特権的条件でもあろう」と指摘しているが, 日本のアフリカ研究にかかわるエスニシティ論ではこの「特権」が生かされていない。  
清水昭俊「永遠の未開文化と周辺民族—近代西欧人類学史点描—」(『国立民族学博物館研究報告』第17巻第3号, 1992年)457ページ。
- (26) 李光一(川田・福井編『民族とは何か』所収)の「総合討論」における発言(353~354ページ)。
- (27) 綾部「建設的民族論のために…」91ページ。
- (28) 島田周平『地域間対立の地域構造』大明堂, 1992年, 1ページ。
- (29) Gulliver ed., *Tradition and Transition...*, p. 9.
- (30) Ibid., p. 24.